

平成28年6月2日

大学史編纂の現代史的な意義

拓殖大学創立百年史編纂室

編集委員 武田 秀司

目 次

はじめに

I 大学史を編纂する

編纂の契機 効果

II 大学史の構成・形態

(1) 通史・資料編一体型

記述的なもの ビジュアルなもの

(2) 通史・資料編分離型

(3) 年表・索引

(4) 写真集

III 編纂組織の編成

学内組織 外部専門家の参画 委託

IV 近現代史と大学史の関連

V 自校史編纂と自校史教育

VI 自校史編纂とアーカイヴズ

まとめとして

パソコンの導入浸透はデータベース化という新機軸

資料は、原文・現代文対照表記しなくても読める

項目ごと時系列を原則に整理・編集する

自校史編纂は建学精神をブランド化する試み

資料編は、正史たる通史のバックボーン

❖❖❖ 論点の整理 ❖❖❖

世に「大学史」とされる書物は、数多存在する。そもそも、組織機関の歴史は、その「時」の政権の正史から始まると言ってよい。代表例は、古代中国の『史記』であり、我が国では『記紀』『大日本史』がそれにあたる。

時代は下って、近代になると早急かつ徹底した欧化政策の下、学校の制度や形が整えられた。公教育を中心に据えたものの、財政不安は拭い去れず、私立学校へ依存するところは、現代に共通する。

幕末、慶應年間にその礎を固めた慶應義塾を筆頭に私立学校は、法律学校を中心としてその数、体制を整えた。義務教育の浸透とともに高等教育へのシステムは、国民の向学心と相俟って専門学校令、大学令を国に公布せしめた。

こうなると、最高学府になることを目指す私立学校は、建学後 10 年程度で、その歩みを記録し始める。最初の私立学校史は、野間教育研究所の調査によれば『明治法律学校二十年史』（明治 34（1901）年 6 月 29 日発行）である。旧制度の間に、この明治大学を含む 23 校が自校史の編纂をなした。

大学史（自校史）は、現在では編纂しない学校を探す方が大変である。では、大学史（自校史）は、どのような意図を以て、どのようにして編纂され、どう活用され、効果を発揮しているかを知ることによって大学運営における寄与効果を見ようというのが本稿の企図するところである。

大学基準協会では、平成 23 年の審査対象校から「大学史の編纂」「大学文書の保存と活用」を「内部質保証」評価対象の一項目とした。

国は、「公文書の管理に関する法律」を制定して、公的機関に安易な文書廃棄を思い止まらせ、その保存を義務付けた。私立大学への法規制は、具体的でないが、大学基準協会がその歯止め役を買って出た格好である。

自校史の編纂とその後のことは、「自校史教育」「アーカイヴズ」の項で考えてみた。この 2 項目は、これからの大学を考えていく中で、重要な位置取りをしているといえる。

本稿は、具体的な制作方法論には立ち入らず、「大学史の編纂手法」というところから、「大学史（自校史）」を見つめている。

建学の精神は、さらに大学の経営理念は、自校史編纂を通じて、その観点から確認が可能になるもの、と思う次第である。

【はじめに】

大学史といわれる出版物は、現在あまた目にする。「〇〇大学 100 年史」「〇〇大学 50 年史」など、ほぼ 10 年刻みで沿革史（自校史ともいう。）の制作が行われている。これまで、学校史といえば周年記念式典での引出物であったり足跡をまとめただけのものであったりした。大学沿革史（自校史）は、『東京大学百年史』が編纂編集思想をそれまでのものから大きく転換を図ったことが契機となり、明治維新後欧米化に寄与した私立大学が 100 周年を迎えたころから大きくその趣旨を変化させてきた。

以前、高等教育問題研究会(FNICS)で「大学の足跡・事跡、研究実績を明示するもの」が沿革史のひとつの側面であることを報告させていただいた（平成 18 年 6 月 24 日 FNICS 月例会、於：工学院大学）。

『大学史をつくる』（東信堂・1999 年）のはしがきには、「沿革史は、…大学の創設から現在に至るまでの歴史的経験と伝統・革新の歩みとを語る本格的な報告書であり、同時に、大学の使命たる教育・研究の実績を世に問う業績書、著作になってきた…」とある。沿革史は、単に創立から現在までの歩みを時系列に従って記述することに重点を置いてきた手法から、脱皮する時期に来ているといえるだろう。

国立大学は、すべてにわたり文部科学省が関係する。教員も職員も国家公務員である。私立大学は、思想信条、宗教をそれぞれ異にし、いわゆる建学の精神を存立の拠りどころとすることになっている。したがって、各大学それぞれの沿革史が成り立ちうる。

筆者は、年史史誌の編集・制作に関与するようになって、30 年を超えた。この経験を踏まえて、大学史編纂の意義を以下のようにまとめてみることにした。

I 大学史を編纂する

<編纂の契機>

大学史編纂を企画・計画するきっかけは、多くの場合周年事業の一環である。また、創立者（学祖）の生誕〇〇年とか没後〇〇年を期してという場合もある。人生の区切り、喜寿や米寿に絡ませる例もある。

この「契機」は、多分に大義名分的な要素を含む。理由は、多大な経費と期間を必要とし、理事者間の共通理解が必要になるからだ。周年を意識せず対外的に自校の足跡・事跡、研究業績を知らしめ、存立基盤強化を目途として、大学史を企画した例は少ない。

「国公私『トップ30』」「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」や「グローバルCOEプログラム」の選定を受けるための裏づけとなる実績証明のために編纂することも、今後はあるであろう。

先に沿革史編纂の趣旨が変わってきた、と記した。

大学設置基準の大綱化による規制緩和は、各大学に、その立ち位置を自らを考え行動することを求めることになったといえる。つまり、大綱化は、進学希望者が増えない中で、学校が増えるという、いわば過当競争世界を創出した。大学は、自校自らをどう表現するかということが、存続をかけて必須事項になったといえる。

<目的>

大学史は、「過去に学び、良き将来を模索」するための糧になるものであるとよくいわれる。大学史は、パンフレットでも大学要覧・大学案内でもない。もっと深遠な内容と壮大な、建学の精神の発揚になるはずのものである。このことは、冒頭にも記したとおりである。

大学は、小・中・高校とは一線を画するものがある。自校史では、人材育成の工夫、実績をはじめ研究成果を披瀝できなければ、その使命を果たせる内容とは言えなくなっている。これも前述のとおりである。

だから、寺崎昌男東京大学・桜美林大学名誉教授は、あえて「沿革史」と言い、最近では「自校史」という用語を併用している。そこには、当該学校の歩んだ足跡を記録すること、もっと重要なことは、自分（自校）を表現することという意味合いが含まれている。無理なことを、難しいことを求めているわけではありませんよ、と言っているかのようなのである。

以下では、「大学史」を「自校史」という用語を主として使用していくことにする。

<効果>

大学案内は、「建学の精神」に関する記事を掲載したところで、これに基づく業績・実績までは手が回らない。自校史は、紙面の制限を受けることが少ない。だから、「建学の精神」「教学の精神」に基づく経営・研究の業績・実績を示す

ことが可能になる。たくさんの史資料を駆使して、読み手に行き届いた説明を施す。本来の意味での **public relation** の活動である。

これは、どんなメディアにも勝る宣伝効果である。

成果品である自校史の巻数が多くなれば見る者を圧倒するであろう。教学の濃度・厚み・広がりといった外部者が知りたいことを網羅していると考えられるからである。纏め上げた自校史自体が、その大学の實力、持っているパワー、エネルギーを示す。

これは、大学ブランドを構成する大きな要素のひとつになると考えられる。

また、自己点検・評価¹にあたっては、最も効果を発揮する。自校史は、年代を追って、その大学の歩みを的確に示しているからだ。

研究業績の集積は、産学協同の役に立つ。

財団法人大学基準協会では、平成23年度以降の大学評価システムとして、大学史編纂を1項目として加えている。該当箇所を抜粋して次に引用する。

3 評価基準—意味と説明—

(1)～(9) [略]

(10) 内部質保証

「大学は、その理念・目的を実現するために、教育の質を保証する制度を整備し、定期的に点検・評価を行い、大学の現況を報告しなければならない」

大学が自律的な存在として機能するためには、自らの活動を点検・評価し、その結果を公表するとともに、改革・改善を行うことのできる組織である必要があります。大学の質を保証するのは大学自身であり、そのための体制を整備していることが、社会の大学に対する信頼に繋がると言えます。

4 評価項目と評価の視点—内容と補足—

(10) 内部質保証

3) 内部質保証システムを適切に機能させているか

[略]

○ 教育研究活動のデータベース化の推進

基礎データの組織的・継続的収集と管理

大学沿革史の編纂

大学文書の保存と活用

¹ 『新大学評価システム—平成23年度以降の大学評価システムの概要—』（財団法人大学基準協会、平成21年10月）

次に、「アーカイヴズ」の存在が提起される。上記引用の末行のとおり「文書の保存と活用」が明記されている。

「公文書等の管理に関する法律（平成21年7月1日法律第66号）」が制定されて、各省庁で個別に管理保存されていた文書の多くが国立公文書館に移管された。また、法律に規定された国立大学法人や公立大学法人は、「文書館」「史資料センター」といった名称を付した組織を次々と立ち上げてきている。私立大学においては、自校史編纂が終わった大学が、その編纂に使用した或いはそのために収集した資料の散逸を防ぐことを第一の目的として設立したのが始まりである。その後、自校史編纂は、作業中であるとか未着手であるが、将来を見据えて自校史編纂室ではなく史資料センターを設置する例が増加している。本法は、公共機関を対象としていることは明らかである。では、公共性の高い機関つまり公共機関類似機関は、対象外なのか。財団法人大学基準協会は、これらに該当するであろう「私立大学」に文書保存と活用を求めている。

情報公開法が制定されたときに、私立大学が「対象外」であったことを盾にして情報非公開を貫いた向きには、耳痛いことであろう。

「大学」は、レガシーつまり研究実績の集積体と言って過言ではない。研究成果の積み重ねの上に成り立つものである。ここが小・中・高校や専門学校との違いである。自校史の内容の違いが生ずるのもここに理由がある。

以上述べたところを裏返して言えば、きちんとした自校史の編纂ができない大学は、生き延びるパワーを欠き、大学ブランドを構築できないと言えないだろうか。すなわち、未来を模索する糧を失っているといえないか。

Ⅱ 大学史の構成・形態

(1) 通史・資料編一体型

<記述的なもの>

昔から編纂されてきた、いわゆるオーソドックスなスタイルである。「通史・資料編一体型」とはどのようなものか。まず、この型は、一般的に通史と言われる歴史（大学の歩み）記述の間に関係資料を全文・抜粋（抄録）して配置する。編纂側の利点は、少ない資料で、また、新聞記事など二次資料を利用しながら制作を進行できるところである。引用資料は、網羅的ではない。資料調査は、文書保管庫の隅々まで行うのではなく、おおむね大学の沿革を辿れる範囲で

足りる。ただし、前述のとおり、自己評価、特色GPなど時代が要請する大学史は、この形態を採る限り限界があるといえる。

例を挙げれば、『共立女子学園百年史（附 写真集）』『共立女子学園百二十年史』『大妻学院八十年史』『拓殖大学六十年史』『拓殖大学八十年史』『港区教育史²』『渋谷区教育史』『学制百年史（規程類を集めた別冊の資料編が附属）』『学制百二十年史』などがある。

<ビジュアルなもの>

写真集の性格を取り入れた見栄えを優先して、記述を制限した編集で作成する。「目で見える歴史」ともいう。文章が少なくなるので簡単に作れるという考えが支配的である。

次の大部な大学史に繋げるための編纂であったり、突貫進行を余儀なくされる状況から生まれたり、記念式典での引出物であったり、広く一般に配布することが前提にあって計画されるものであったりする。

例としては、『二松学舎大学百十年史』『京都産業大学40年史<1965～2005>』『東京経済大学の100年』などがある。

(2) 通史・資料編分離型

近年、主流となってきた型である。百年史であれば、10巻前後の構成になる。東京大学は、10巻(約12,000頁)構成である。

「通史編」「資料編」「部局史編」「別編」「年表・索引編」などを全体構成とし、詳細な内容（収録資料は、網羅的）となる。

この型は、県・市町村史から始まったといえる。県・市町村史は、そもそも昭和40年代に編纂ブームに火がつき、50年代に入ると各自治体に「〇〇市(町・村)史編纂(集)委員会設置条例(規則 or 規程 or 要綱)」が制定されている。この時期に自治体史を編纂しなかった公共団体は、少ない³。

初めて編纂することになった自治体は、多くが前述の一体型であった。県史は、戦前から編纂してきたところが多く、その反省に基づいてこの時期には通史・資料編分離型になっている。

例を挙げれば、藤枝市(静岡県)などは、1970年代に第一期編纂(上・下巻)を終え、1997年に「藤枝市史編さん委員会規則」を全部改正し、1998年から第二期編纂に着手した。理由は、文化事業に対し、市首脳及び市議会の

² 東京都港区教育委員会は、当初予定の上下巻を刊行後、貴重な資料の多さに後年新たに資料編を1巻を発行している。

³ 千葉県の長生村などは、この時期に刊行しなかった例であるが、昭和35年に規模は小さいが村史編纂の経緯がある。

認識が高く熱心であったこと、そして第一期編纂時点で積み残した資料が多かったことが挙げられる。この事例は、第一期編纂と全く違ったところから始めているところが、注目に値する。

自校史においても前回制作のものを土台にして、次に続く年代の内容を積み上げるという発想は、よく耳にする。今、大学全入時代を迎えたこの時代に、先刊踏襲では大したレベルは期待しえないであろう⁴。

立命館大学では、かつて『立命館八十五年史資料集』（全8巻）に続き『立命館百年史資料集』を編纂し、最後に『立命館百年史 資料編』を編纂した。

『立命館百年史 資料編』第1巻は、旧制時代ということで、創立時分から昭和20年度までの内容で纏めている（A5判 約1,800頁）⁵。

この、「資料集」をまず作成するという方法は、資料散逸を防ぐ手段として、高く評価できる。扱う年代を限定し、その中で設立関係、教学関係など資料編を意識して体系的に資料を分類することで、はじめをつけやすくすることができる。5年あるいは10年をひとつの区切りとしても、B5判でも相当なボリュームになるであろう⁶。「資料集」は、「資料編」編纂の基礎となるものであるから、各年度における出来事を網羅、その年度を俯瞰できるものであることが求められる⁷。

拓殖大学では、編纂計画年数の関係から立命館のような「資料集」の作成は、見送った。学内・学外の資料所在地を限なく調査、詳細な目録を作成し、公印のある文書はすべて複写して、簿冊、綴りごとに蓋付きの箱(弁当箱型)に収納して編纂資料とした。蓋付きの箱に入れることの利点は、例え積み上げた箱を崩したところで中の資料がバラバラになることがない点である。資料が混ざるといふ事故がないだけでも安心感がある。

百年史編纂にあたり、当時の小田村四郎総長は、「発刊の辞 史実を正しく実証する場に」と題して

⁴ 寺崎昌男「講演・百年史の意義と作成のプロセスを語る」『拓殖大学百年史研究』1・2号 合併号 19頁以下。

⁵ 立命館百年史編纂担当者は、「収録範囲は、学園創立以前の私塾立命館に関する資料や、西園寺公望と中川小十郎との関係を示す資料を一部収録するとともに、主に学園創立の1900(明治33)年から太平洋戦争終結の1945(昭和20)年までの約45年間…」と記している（『立命館百年史紀要 第九号』342頁）。なお、1800頁というのは、造本上の限界値を越えているといえる。丸背がフレキシブルな角背、というか直方体（箱枕）の本になっている。

⁶ 百年史の場合、10年区切りで10冊(各300頁見当)が予想される（頁当たりの文字数は、約2,000字で計算）。引用した『立命館八十五年史資料集』は、8巻2,888頁である(B5判 35字×29行×2段)。立命館大学は、学園紛争、校舎移転に伴う引越しという資料散逸の原因となる出来事はあったが、戦災に見るような全焼という損害を受けていないため、文書の多くが残っているものと考えられる。

⁷ 『立命館百年史紀要 第二十一号』387頁以降

創立百周年を迎えて、本学は改めて建学の精神に立帰り、次の百年に向けて使命達成の歩を進めなければならない。そのためには、過ぎ来し百年の歴史の全体像を、出身者の足跡も含めて包括的に明らかにすることが求められる。我々は、その足跡が『国際大学』の名に恥じないものであることを自負しているが、これを自画自賛するのではなく、国際性において明らかにしていく必要がある。そしてそれは何よりも実証的でなければならない。

と記している⁸。

これまで、資料編 8 巻、部局史編、別編 3 巻の計 12 巻の『拓殖大学百年史』が刊行されている。創立百周年記念事業事務局・事務室が平成 7（1995）年（創立 95 年）に設置され、年史編纂部門は、平成 9 年「創立百年史編纂室」として独立した。次いで、平成 10 年には、「日本文化研究所附属近現代研究センター」が設置され、編纂組織が出来上がった。この枠組みに人員が投入されるのは、平成 13 年度であり、まず略年表の作成に着手している。平成 13 年度には、『資料編一』の原稿入力を委託することから制作作業を開始して足かけ 6 年でこれだけの成果を挙げることができた⁹。

刊行予定からすると、拓殖大学では資料編の編纂を終え、通史編の編纂が始まった。平成 18 年 6 月に FMICS 月例会で報告した¹⁰ように、大学には、資料が意外と保存されているものだ。事実、拓殖大学百年史資料編は、当初 4 巻構成であり、それは前記の規模まで膨らんだ。百年を振り返り、次の百年を設計する糧とするためには、全学的な人的パワーの結集とともに、時間をかけることを惜しんではならない。自校史は、時間をかけることを惜しむと、質の低下をもたらす。

拓殖大学百年史の通史編では、「アジア社会の近代化と拓殖大学」というテーマを設けた¹¹。資料編の資料がどこまでこのテーマを実証することになるか、読

⁸ 『拓殖大学百年史研究』1・2号合併号 3頁

⁹ 『大学史をつくる』から編纂期間が明示されているものをいくつか紹介する。①関西大学が『関西大学百年史』5編6巻すべてが完成したのは平成8（1996）年3月のことで、昭和57（1982）年11月に百年史編纂委員会が設置されてから13年半、昭和61（1986）年11月の創立百周年記念式典からでも10年半が経過……」129頁、②明治大学が1994年10月時点で「この明治大学百年史の編纂の仕事は、昭和53（1978）年12月に活動を開始して以来、今日まで実に15年10か月歳月を閲している……。ここに第4巻通史編Ⅱの刊行によって百年史の編纂そのものの仕事は終りを告げる。」155頁

¹⁰ 高等教育問題研究会(FMICS)のFMICS REPORT (<http://www.fmics.org/>) を参照

¹¹ 明治大学史資料センター・村松玄太「2005年7月14日研究会 齋藤高夫氏『拓殖大学における百年史編纂事業の経過報告』を聞いて」（全国大学史資料協議会東日本部会会報『大学アーカイブズ』（2005.10.31 No.33））に「拓殖大学の近代史上における位置付けをどのように考えるか、という問題について触れている。主題の置き方により、資料収集の方針や分析の

者の評価が気になるところである。『拓殖大学百年史 資料編四』では、台湾協会学校に始まる専門学校そして旧制大学における資料によって学校、教職員及び学生の活動が実証的に見てとれる。今のところ編纂事業は、成功への道を歩んでいると自認している。続く『資料編五』では、GHQ関係に始まり、高度成長の只中、昭和40年台初頭までを収録、『資料編六』では、その続きから創立100周年にあたる平成12年度までを収録した。当事者としては、「資料が語る百年」を表現できたものと自負するところである。

拓殖大学の方針では、資料編の編纂を優先的に進め、『通史編』編纂グループに執筆材料の提供をしていくことにした。

しかし、物ごとはなかなか思いどおりに運ばないもので、資料編の編纂に時間がかかり、結局、資料編グループがその任を引き受けることになった。そのことが、却って功を奏したかもしれない。学生向きに、をテーマとして稿本（通史4巻本）を編纂した。『拓殖大学百年史 明治編』『拓殖大学百年史 大正編』『拓殖大学百年史 昭和前編』『拓殖大学百年史 昭和後編・平成編』である。

この通史4巻本は、ずいぶん示唆を与えることとなる。『拓殖大学百年史 第一巻 明治大正期』（正史）は、通史4巻本の『明治編』『大正編』を融合させるだけでは済まなかった。既に歴史になった時分の内容で、筋書きが出来上がっているものという先入観は吹き飛んだ。これまでの『拓殖大学六十年史』『拓殖大学八十年史』をよりどころにした記述は、引用文の引用箇所を含めて全面見直しすることになった。『第二巻 昭和前期』は、問題点掘り起こし段階で、ある人について台湾から照会が来たことが、進行を緩めることに繋がっている。台湾における戸口調査業務に携わった台湾総督府担当者について、これまでまったく記述されて来なかった。調査の後、本学の教員となり、その助手を務めたのが本学卒業生であったのだ。出版の遅延が招いた福というべきだろうか。編纂関係諸氏にとって、参考事例となつてほしいものである。

(3) 年表・索引

年表は、各大学とも大小を問わず作成している。前記(2)の分離型にあつては、独立した1冊にする例が多い。年表は、出来事を、年代を追って一覧できることから、編纂は必須である。

今、この分離型大学史の構成にあつて、「歴史を実証する」内容であればある

視角は当然異なってくる。・・・同大学とアジアとの密接な関わりである。拓殖大学はアジアをはじめとして海外に多数の関係者を送り出してきた。そのことを踏まえ『アジア社会の近代化と拓殖大学』をテーマとして編纂事業を進められたという。資料調査先も海外に求められることになり、韓国・イギリス・アメリカ・中国・台湾・ロシア等へ多数の調査を実施した・・・』とある。

ほど、索引—総索引—が必要になる。内容検索ツールが、目次のみということでは心細い。資料編の活用にあたって索引は、絶対条件になると申し上げたい。

索引は、種類を挙げれば「事項索引」「条文索引」「人名索引」「地名索引」「書目(名)索引」「音訓索引」「総画索引」「部首索引」などがある。

この自校史における索引は、「総索引」というべきもので、事項索引と人名索引を組み合わせたものと言え、判りやすいだろう。ただし、主項目と枝項目の区分け、線引きは一筋縄ではいかない。関連、同義(意)事項でも用語が違う場合がある。これが曲者で、索引作りを難しくする。だから、索引の編集は、独立した一学問領域であると言う人もいるくらいだ*。

索引用語・事項の配列の仕方は、五十音順やアルファベット順といった大枠の基準が示されている。いろは順が使われないのは、学校で「いろは」を使用せず「あいう」の五十音になったからである。例えば、五十音順を配列基準にしたとしても、書物によっては欧文表記やカタカナ表記が含まれる。こうなると、まず欧文用語をアルファベット順に載せ、次いでカタカナ用語を五十音順に、ひらがな・漢字用語を清音で五十音順に配列する方法がある。では、パソコンを利用した“完全五十音順”は、どうかといえ、それもひとつの方法である。

次段階では、同音の漢字は、画数の少ないものから多いものへという順であるとか拗音促音、濁音半濁音の並べ方の基準を決めることになる。これらは、総論と言うべきものである。

索引づくりで最も苦勞させられるのが、読み方である。すべて音読みとか訓読みに画一化することはできない。したがって、正確な読み方ができないと中途半端な、いわゆる役に立たない索引になる。だから、索引は著者が作成すべきであるという論法になる。

自校史資料編の総索引にあつては、編纂者が読み方を決めることになる。つまり、難解語(多くは人名)は、可能な限りの文書文献調査、聞き取りにより判断できる材料を探さなければならない。そこで、凡例の項目と内容が重要になる。これから、自校史編纂における索引の作り方について、多くの創意工夫と試行錯誤がされてくるだろう。いずれ近々に全国大学史資料協議会あたりに、索引の作り方や「索引編」の編集の仕方に関する情報交換の部会ができて、不思議ではないと思われる。

資料編が大部になった場合、各巻の目次だけでは十分な活用を期待できない。例えば、制度（寄付行為、学則改正）変更の効果を知りたい場合、『資料編一』

うべき仕事であるが、場合によっては編集者が協力を求められることがある。この場合、固有名詞や術語などをすべてのページにわたって拾いあげなければならないと、ともすれば初心者は考えがちであるが、索引の役割は、読者がある事項について調べるのに便宜をはかるということであるから、特にその事項について説明されている箇所のみを重点的に拾うべきであろう。

(4) 写真集

「写真集」、これは、口絵では頁数が多くなりすぎる場合や写真を資料として扱う場合に作成し、図録と併せて制作することもある。歴史を語るというより写真説明が主になる。グラフ誌ほど、写真を誇張していない点で、アルバムという範疇であろう。索引に収録する事項に、写真との関係も併録する必要がある。

(5) PC を活用する選択肢／CD-ROM や DVD-ROM など

パソコンの発達普及は、メディアに大きな変化をもたらした。すなわち、重厚長大から軽薄短小へという世の動きは、「紙」からの脱却を進展させてきた。最近の話題を拾えば、携帯小説がその例である。

自校史についても、メディアを紙から CD-ROM や DVD-ROM を利用する動きがある¹⁴。当然、検索機能は、アプリケーション開発して付すことも PDF 化して Adobe Reader の機能に依存することも、企画次第という時代である¹⁵。費用対効果で考えて選択すれば良い。

利点は、まず本に比べて収納場所が狭くて済む。次に、通読するのでなく閲覧であれば、非常に簡便になる。第 3 にインターネットを通して、世界中に配信可能になるということだろう。

注意すべきは、最近のハッキング流行である。ソフトウェアである以上、またネットワーク上における共有データである以上、ハッキングされ、改ざんの被害に遭うことを承知しておくべきである。物理的に遮断されていない限り、技術の進歩発展は、ソフトウェア（データ）を危険にさらす。

¹⁴ ここでは、メディア配布を前提に説明した。もちろん、IT コンテンツとするならば、CD-R、DVD-R、DVD-RAM などといったメディアを利用することはもちろん織り込んでいる。大学史のパブリッシング・データは、膨大になるため、編纂室で全資料を入力レイアウトしてデータを製作することは不可能である。だから、印刷業者なり、データ事業者なりに委託してデータづくりすることを前提としている。

¹⁵ PDF は、外部からの不正アクセスによって、データ改ざんの危険が少ないことが大きな利点である。技術の進歩は、この PDF さえ編集が可能になってきている。

システム・エンジニアが常々「必ずドキュメント（プリント）を作って、確認印を捺印、保存すべし」と言うとおりに、ドキュメントが最後にものをいうのである。データ活用には、必ず「本」があって効果を得られる。このことは、何があっても忘れてはならない。

Ⅲ 編纂組織の編成

<学内組織>

学内には、編纂委員会→編集委員組織→編纂事務局という3段階の組織を設けることが多い。

教員・職員を取り混ぜて編成されるわけであるが、大学という性格上、教員か理事長（総長・学長）がトップになり、旗振り役には、教員が就くというのが一般的である。

拓殖大学¹⁶では、資料編に注力するため、「百年史資料集編集委員会」を組織した。これは、拓殖大学創立百年史編纂室に置いた編集委員とは、別のものである。すなわち、文書の保管担当者こそが、その文書の重要性、真贋の見分けなど、正確を期す上で必要な協力体制として機能している。この委員会は、文書管理の方式、枠組みが明確になっていない状況下であって、所蔵あるいは保存資料の提供協力を円滑にすることにも目配りした組織である。全学的な取り組みをアピールするための建前の機構のように思われるかもしれない。屋上屋を重ねるように見えるものの、原稿を整理して、脱稿する前に、収録資料についてその適否、認識違い、抜けといった点のチェック機能を果たしてくれている。

常勤の編纂室員の作業が、非常勤の委員によって構成されている百年史資料集編集委員会を経る効果の意味するものは何か。編纂専従者の予想を越える資料の追加、削除そして整合性を成果物（大学史 資料編）にもたせてくれるということである。

<外部専門家の参画>

原稿作成にあたり、何から何まで学内要員に頼るのも一方法であるが、「複数

¹⁶ 拓殖大学の編纂体制については、前掲の「2005年7月14日研究会 齋藤高夫氏『拓殖大学における百年史編纂事業の経過報告』を聞いて」には、「事務組織の『創立百年史編纂室』と研究支援組織である『日本文化研究所近現代研究センター』が担っている。」とある。

の外部専門家を専従で参画させること」を提案したい。

『大学史をつくる』には、編纂の留意点として教員・職員の協働作業が望ましいということが示されている¹⁷。行政文書に関しては、実際に起案・保管など文書管理業務に携わる機会の多い事務職員の方がその能力に長けている。教員のもつ資料の分析・解読という面での能力、学術的要素を盛り込む能力は、事務職員にはないものである。したがって、協働は、大学史編纂に重要な位置を占めることになる。

問題は、双方とも大学内部者であるところにある。すなわち、いわゆる手前味噌に陥りやすくなる、ともすれば視野が狭くなる可能性を秘めているといえないだろうか。内部の担当者の制作では、現経営者の意向や忖度が反映されやすい面を否定できないからである。そうした大学史は、後世から批判される対象になりやすい。時には、ダメ烙印を押され、やり直しという醜態を演ずる結果だって考えられる。そこに、現体制に利害を共有していない（利害を感じない）第三者的な存在が果たす役割があると考えている。

そこで、「醒めた目」としての第三者的立場の専門家「外部専門家の導入」を提案したいのである。

「外部専門家の導入」は、学内において中立的位置にあり、ものの見方に客観性が増し偏りのない大学史編纂に寄与することができる。

ここでいう「外部専門家」とは、いわゆる歴史家や歴史研究者を意味するものではない。歴史家などは、批評者として存在理由はある。が、ここで言うのは、他校をはじめ幾多の年史編纂の経験者を意味している。

前に「複数の外部専門家」と述べたが、これは、2名以上外部者がいることによって、中立性、客観性の精度が増すことを示している。

外部専門家は、資料に関してだけ必要というわけではない。

通史についていえば、「原稿の素案」は確定稿ではない。第一次稿というもので、必ず第二次、第三次原稿へとレベルアップしていくことを想定したものを指している。しかし、この第一次原稿は、推敲過程で内部の経営陣や教学陣からどのような赤字が入ろうとも、執筆者に変更がない限り、基調はそう変わらない。歴史の記述で、最初の稿が果たす意味は大きい。ここでも、執筆された原稿に対する読み方や見方は、当然中立性が高くなるといえる。学内者であれば、当然のことと信じて疑わない事象、事柄でも第三者たる外部者には、意味不明な表現であったり、思い入れが強い表現であったりといった疑問を呈する

¹⁷ 前掲『大学史をつくる』東信堂 76頁参照

ことが可能である。

以上のことから、大学史編纂には二つの特徴が見出せる。

その一は、資料編の資料収集・分別・整理であれ通史編の記述であれ、技術的な側面がかなりあるというところである。

その二は、資料を検分することにより、その大学の研究実績や教育による社会的な貢献度を、他大学と比較して客観的に評価しやすいことである。

組織内部の当事者には、比較がもっとも難しい。

外部専門家としては、①大学教員経験者 ②大学史編纂経験者 ③出版印刷経験者 等がその資格者として考えられる。①の大学教員の場合は、歴史学か教育学に携わったことがひとつの要素といえる。②は、まさに経験値が生かせる。③は、年史史誌の編集経験者としたかったが、さまざまな単行本編集経験は、多分に効果を発揮すると考えられる。雑誌編集者は、断片的に制作過程理解している例が多いので、要注意である。印刷業経験者は、現場進行を担当したことがひとつの要素である。印刷営業の経験では、外部専門家に適さない。印刷業経験者は、見積りに精通していることも条件になる。

以上のことから「外部の専門家」の参画が望ましいということは、十分に理解いただけることと思う。

東洋大学では、寺崎昌男東京大学・桜美林大学名誉教授を外部専門家として招いた。これが先覚的なものであろう。

拓殖大学では、外部専門家を導入するとともに、初動段階において作業能率と効果を期して次の委託方式を組み入れた協働作業（ジョイント・タスク）を実行した¹⁸。

外部専門家は、編纂室編集委員に配している。

『拓殖大学百年史 資料編四』の編集後記に概要が次のように記されている。

三冊目以降は、学内保存・所蔵資料の中から資料の大部分を調査及び収集することが課題となった。

そこで、限られた時間で最大効果を挙げるため、「ジョイント・タスク・

¹⁸ 前掲「2005年7月14日研究会 齋藤高夫氏『拓殖大学における百年史編纂事業の経過報告』を聞いて」に「1999年の『拓殖大学百年史研究』の創刊を皮切りに…成果物の刊行は現在までに50冊を優に超える。…。だが、その実現には学内調査を速やかに進める方策（ジョイント・タスク・フォース）の検討やアウトソーシングの積極的採用など、興味深い事例が報告され…た。」とある。

フォース」を企画した。短時間で資料調査を完結するために、大学史編纂に経験ある出版社とのジョイント作業とした¹⁹。[中略]

この「ジョイント・タスク・フォース」の成果如何が拓殖大学百年史編纂の成否を左右すると考えた²⁰。ジョイント解消後にも、また新資料の発見があった。百年かけて積み上げたものを貪欲に集められるだけ集め、集成する作業を限られた期間で行うことは極めて困難なことである。精緻さと深度を求めれば、作業進度が遅くなる。これを打破しようとして、遮二無二押し切ってきた。このジョイント作業は、今後の大学史編纂に対し、発想の転換を提起する一石になろうか。

拓殖大学の試みは、今後の大学史編纂の方法に一機軸を提供したといえるであろう。このことを指して、筆者は、資料は探せば出てくると言うのである。

<委 託>

これは、資料調査から本造りまでを一貫して、外部業者に任せてしまう方法である。場合によって、大学が必要資料を提供し、その範囲で制作業務を請け負わせる。

学内担当者を就ける場合とまったく業者任せの場合とがある。

学内担当者がいると、資料調査の協力、原稿校閲の世話など円滑に作業を進められる。また、不足資料についても対応が円滑になる。

まったく業者任せとした場合には、結果のみが示されるという可能性を覚悟しなければならない。

この方式は、分離型で計画する場合には、大学全体の情報開示をしない限り期待した結果を得るには無理があることを認識しなければならない。つまり、学外秘でさえ白日の下に曝す覚悟ができなければ、この方法は採用すべきでない。

多くの場合、学内調整が不調であったり、学内事情に精通した教員がいなかったりとか、事務局組織の脆弱さが外部委託せざるを得なくなる要因である。

例としては、『大妻学院八十年史』『東京女子医科大学百年史』『新編千代田区史』『横須賀市議会史』『鎌倉市議会史』などがある²¹。

¹⁹ ジョイント・タスクの実践にあたっては、大学史等の編纂経験を踏まえて業者を選択し、単独で契約（業務委託契約）を取り交わしている。大学と出版社の合同組織を構成したわけだ。印刷製本の契約と一括することには、おぞなりに流れる危険があり、避けるべきである。

²⁰ 拓殖大学では、資料編編纂グループと通史編編纂グループが並行して作業を進行している。ここでいう「拓殖大学百年史」は、資料編を指す。

²¹ 外部委託制作の大学史は、一体型がほとんどである。『大妻学院八十年史』のあとがき（唐澤

IV 近現代史と大学史の関連

大学史というと、学制、教育政策及び教育環境の枠内で執筆・編集されることが一般的であった。

ところが、四半世紀以上も前のことになるが、盛んに産学協同ということがいわれ、理論と実践のコラボ、実学指向が持て囃された。こうなると、狭い範囲で編纂を済ますわけにいかなくなる。すなわち、創立(設立)前後の社会の様子、また、宗教がバックボーンにある場合には、その精神から編纂対象にする必要がある。

どんな社会情勢の時に創立し、成長して現在に至ったかを纏めることは、まさに「過去に学び、良き将来を模索」することを意味する。大学が、広く日本社会に生き、世界に生きていることの証しである。

現存する大学は、明治初年の学制以後のものであるから、日本及び世界の近現代史の中に存在する。この時代の流れの中で自校の歩みを捉えようとする大学も出始めている。こういう要求は、これまで自校史編纂に携わった経験者にとってもカルチャー・ショックであるはずだ。自校を語って、歴史を語らずというのが学校史の主流である。これから編纂を計画する自校史はもちろん、現在編纂中の自校史もこの視点を見失っては、向後の憂いを残す、と心得るべきである。

V 自校史編纂と自校史教育

自校史編纂が浸透する中で、学内活用を模索する動きが出てきた。せっかく編纂した自校史が図書館や他大学編纂室の書架に置かれているだけでは、十分に活用されているとは言い難い。また、入学してくる学生は、自身の置き場に理解がいかず、五月病の原因にさえなっていた。

寺崎東京大学・桜美林大学名誉教授は、次のように講演²²されている。

・・・一九九七年の春学期、忘れもしない、立教大学で全学共通カリキ

富太郎)は、興味深い記述が満載である。委託業務を考えるにあたっては、示唆に富んだ文章であろう。

²² 『名古屋大学大学文書資料室紀要』第二十三号(2015年3月31日 名古屋大学大学文書資料室)寺崎昌男「基調講演 大学沿革史編纂の効用を考えるー特色の確認、アイデンティティの醸成、そして自校教育ー」

ユラムが始まった年の総合科目（「大学論を読む」）で、ふと気が付いて、このことをやってみたのです。なぜやってみる気になったかという、目の前にいる、当時、四五人の各学部から来た新生を主とする学生たちが、いかに立教大学を知らないかが分かったからです。・・・彼らは偶然、立教にいと分かったのです。「建学の理念」も何も知らないで、座っていたのです。・・・次の時間からは、趣旨を変える、シラバスも無視し、「立教大学とは何か」をやると言いました。学生たちは、初めて聞いたという顔をしていて、ものすごく喜びました。

・・・。

その中で、学生たちはきれいな話だけを聞いているだけではつまらないらしいことも分かってきました。一番喜ぶのは、何と言っても特色です。・・・同種性と異種性を言うと、ものすごく彼らは喜びます。・・・「私はやっと就職が内定して、来年卒業します。私は今まで子の大学画嫌いでたまりませんでした。でも、この講義を聞いて、すごく好きになりました。卒業直前にこのような勉強をさせていただいて、本当にありがとうございました」。そういう感想が続々出てくるわけです。それで分かりました。彼らは知らなかったのです。しかし、知りたがっていたわけでもありません。ですから、彼らが抱いたのは満足感ではなく、安堵感を得たのだということも分かりました。その材料となるのが沿革史編纂です。これは非常に大事なことだと思います。つまり、学生を含めたアイデンティティの形成です。

学生たちは何を学ぶかという、自分の位置、所在、帰属を、良き自校教育を受ける中で得ることができるのです。自らを取り巻く願い、配慮、努力が分かって安堵するのです。悪いことを話しても結構です。立教では今、「戦争と立教学院」という科目が開かれ、先生方が立教は戦時中にどれだけ恥ずかしいことをやったかを全部学生に話しておられます。それでも学生たちは、「明日からこの学校を辞めます」とは言いません。・・・そうすると、そこで落ち着いて勉強しようという気持ちになっていきます。

このように、沿革史のもたらす効用は意外に広がってきているのです。このことを一番よく調べていらっしゃるのは、岩手大学の大川一毅先生です。

立命館大学の芦田文雄元教授は、全国大学史資料協議会研究叢書第5号『年史編纂の現状と展望』所収「自校史教育を考える―立命館大学の場合―」の中で、次のように記している。

私たちの自校史教育……

『大学改革』のなかで、それぞれの大学のアイデンティティともいえるべきものを、いわば縦の歴史のなかに、そして横の歴史ともいえる全国の諸大学での取り組みとの対比のなかに、私ども立命館の歴史をどう位置付けていくか、立命館の100年の歩みをどう特徴付けていくかという、そういうことが開講の趣旨でありました。」「私達の自校史教育は、『立命館百年史』の編纂と密接に関わらせて、立命館百年史編纂室が母体になって取り組んでいます。……

この研究会で出された様々な研究資料、これが自校史教育のレジュメになっております。……冊子を作りまして、これを学生諸君に前もって配布して講義前には目を通すようにしてもらっています。『立命館百年史』第1巻～第3巻が刊行される前後には、新書判程度の読みやすい『立命館小史』（仮称）を発行してはという話も出ており……。〔問題提起〕その第1点は、何よりもこれは自校史教育という講義、つまり学生に対する教育ですから、この講義を通じて学生に何を学ばせるのか、何を彼らに投げかけるのか、ということに関する問題があると思います。

次に第2の問題です。私達の大学は、『日本近現代と立命館の100年』というテーマを設定……。この趣旨は、立命館を通して日本の近現代を見る、あるいは日本の近現代の中で立命館を見る、という狙いなのですが、問題は、……近現代全体と、同時にその中で日本の高等教育や大学の在り方、大学論、そして我々の所は私学でありますから私学論ですね、

これらの比重をどういうふうにとっていくのかという問題があります。

……

最後に3番目の問題提起です。我々が大学史の編纂、あるいはそれに基づく『大学史』の講義をやっていく場合に、それが現実に大学の中でどのような位置をもっているだろうかということに関わる問題であります。……とりわけ多くの教職員に、ここでの課題を、どういうふうに投げかけて共有化していくのかという課題です。そして、『大学改革』を一緒に考えていって頂く力をですね、大学の中でどういうふうに醸成していくのか、これが非常に大切なことだと私はおもっております

この自校史教育は、新入生のみが対象となっているわけではない。つまり、学部も学年も関係なく、縦断的横断的科目として置かれている。自校史編纂の講演などを浴している両先生の例を引いたが、現在では、実際に多くの大学で自校史教育科目が設定されている。

いずれも自校史教育の目的は、学生に「帰属意識を醸成し、愛校心を育成」することが主眼である。4年間在籍して、校歌さえ歌うことも覚えることもなく卒業することの味気無さに気づき「居場所」を発見させる機会を与えることである。

大学のアイデンティティーをはっきりさせ、それを教職員はじめ学生OBともども共有させていく作業をも指している。

平成14（2002）年10月27日付朝日新聞²³には、次の記事が掲載された。

大学の「自校史」知って 相次ぐ開講、学生に誇りを持たせる狙い

大学創立からの流れをたどる「自校史」を教える大学が相次いでいる。偏差値で大学を選んだものの、学ぶ目標を見つけられず悩む学生に、独自の伝統や校風を紹介することで自信や誇りを持たせる狙いがあるようだ。大学自身の存在意義を見つめ直すことにも一役買っている。

00年〔2000年〕に創立100年を迎えた立命館大（京都市）は今春から「日本近現代と立命館の100年」の講義を始めた。「最後の元老」として知られる西園寺公望による私塾「立命館」の創立から始まり、敗戦後の混乱、大学紛争へと続く。

講義には予想を上回る300人以上の学生が詰めかけた。とりわけ60～70年代に学生が大学のあり方に異議を唱えた大学紛争を扱った回は反響が大きく、「今の学生にはないエネルギーを感じた」などといった感想が寄せられた。

こうした自校史の講義は明治大（開講は97年度）▽京都大（同99年度）▽立教大（同99年度）▽名古屋大（同99年度）▽広島大（同01年度）などをはじめ各地の大学で始まっている。

97年度に「九州大学の歴史」、99年度に「大学とは何か」の講義を相次いで開講し、国立大では自校史を教える先駆けの一つとなった九州大（福岡市）では、年間約300人以上がこうした講義を受講する。

受講生からは「九大の歴史は自分たちが作っていると自覚した」などの声が寄せられた。

全国75大学の歴史資料保存の研究者らでつくる全国大学史資料協議会によると、日本の古い大学は1900年前後にできたところが多く、創立100周年など節目の年を迎えている。それが自校史の講義が広まる理由

²³ 『朝日新聞』は、同様の記事を平成14年10月22日、23日に掲載している。

また、『読賣新聞』（平成21（2009）年2月18日）には、寺崎昌男寄稿「広がる『自校教育』」がある。

の一つになっているとみられる。

「京都大学百年史」の編纂（へんさん）に携わる西山伸・京大助教授は「大学そのものが自らのアイデンティティを探している。自校史は大学の原点を見つめ直すよい機会になるのではないか」と話している。

次の『朝日新聞』（2012年10月12日）記事は、興味深いので、長文であるが、全文を引用しておく。

学んでほしい、母校のこと 自校の歴史、大学が授業 「自信持って通えるように」

自分の大学の歴史や現状を教える「自校教育」が、各地の大学で活発だ。受験対策に追われて、入った大学のことをよく知らない……。そんな学生に、誇りを持って新たな目標への気持ちを高めてもらう狙いだ。

4年後に創立50周年を迎える追手門（おうてもん）学院大（大阪府茨木市）は、記念事業の一つに「自校教育の推進」を掲げる。背景には、別の大学が第一志望だった学生が入学する例が少ないことがある。「自信を持ち、ここに根をおろせるように、どういう大学かを教えたい」と学校法人追手門学院の教育主事、山本直子さん。今から準備に忙しい。

追手門学院は去年、テキスト「追手門の歩み」を作り、傘下の幼稚園児から大学生まで全員に配った。DVDも制作中で、大学の授業の中身作りもこれから本格化させる。

同じように幼稚園から大学までを学校法人が経営する成城大（東京都世田谷区）は、「大学だけが成城」という学生が約8割を占める。成城の一員という意識をもっと持ってもらおうと、「成城学園を知る」という授業で歴史や今の課題を教えている。今年度は教職員と父母も聴講した。

授業の形はさまざまだ。

広島大（広島県東広島市）の選択必修科目「広島大学のスペシャリスト」では、教員だけでなく、担当職員が大学の人事戦略も話す。

小宮山道夫准教授（教育史）は「前期にやる『広島大学の歴史』で出てくる課題に今、どう取り組んでいるかを後期の『スペシャリスト』で紹介している」と説明する。

広島大の理念に「平和を希求する精神」がある。「建学の精神を知ると学生は誇りを持つようだ」と小宮山准教授。今年度の「歴史」の受講者は540人で、希望者はその2倍近くいた。「スペシャリスト」の受講者も、昨年度は約230人いた。

香川大（高松市）はテキスト「香川大学検定」を用い、クイズを入りに歴史を学ぶ。学生も加わって毎年改訂し、地元・香川県のことも紹介した。

明治大（東京都千代田区）は駿河台など全3キャンパスで自校教育の授業を設けており、来年オープンする中野キャンパスでも開く予定だ。立教大（同豊島区）は今年度、池袋キャンパスで、1コマから3コマに増やした。

九州大（福岡市東区）はキャンパスを郊外に移転中。自校教育を担当する折田悦郎・大学文書館教授（日本近代大学史）は「大学の源流や歴史をどう伝えるか、重要性が増している」と話す。

「歴史の影の部分も教えます」と言うのは、大阪市立大（大阪市住吉区）の大島真理夫・大学史資料室長。大学紛争をとりあげると、学生の関心が高いという。「ショックを受ける者もいるが、先人の苦勞を知ると、しっかり勉強しなければとの気持ちになるようだ。教員も学生が何を考えているかを知る機会になっている」と語る。

● 「大学の一員」意識育む

自校教育は1990年代後半から本格化した。80年代から各大学で大学史を編む作業があり、資料収集が進んだことが背景にある。

岩手大（盛岡市）の大川一毅准教授（教育学）が2008年に全国752大学に尋ねたところ、136校が「自校教育を実施している」と答えた。自校のことだけで授業をつくったり、授業の一部で自校の歴史に触れたり、やり方はさまざまだった。「検討中」も33校あった。「増加期は一段落し、今は各大学が授業の改善や充実をしている段階だ」とみる。

大川准教授によると、学び方を新生に教える初年次教育の一環という大学が多いが、そこから広げて、上級生も受講できるようにする動きもある。京都大などは全学年が受講できる。

大学にとって自校教育の意義とは何か。「学生や職員に大学への参加意識が生まれる」と、立教大教授時代に始めた寺崎昌男・東京大名譽教授（大学史）は指摘する。

「歴史が浅い大学なら、創立の経緯をきちんと話せばよい。教員がなぜその大学で教えているか、大学がどう変わり、それをどう感じたかを語るのも大切。こんな研究がしたい、こんな大学を作りたいと大学はたくさんの願いや志に基づく組織だ。自校教育でそれを知れば、自分も担おうという気持ちになる」。だから教員だけではなく、学内の色々な人や力を活用することが大切だという。（宮崎健二）

■ 自校教育の授業の例

大学名	授業名
北海道大	学問の世界
岩手大	大学の歴史と現在
明治大	明治大学の歴史
立教大	立教大学の歴史 立教学院と戦争
成城大	成城学園を知る
名古屋大	名大の歴史をたどる
岐阜大	岐阜大学の教育研究と運営
京都大	京都大学の歴史
大阪市立大	大阪市立大学でどう学ぶか
広島大	広島大学の歴史 広島大学のスペシャリスト
香川大	人生とキャリア
九州大	九州大学の歴史
大分大	大分大学を探ろう

ここに、自校史教育の授業を設けている大学が網羅されたわけではない。それでも、かなりの大学が自校史教育を取り入れているということは、大学受験生と大学との間の溝があり、それを埋めることでお互いの融和、帰属意識醸成、そしてそこから卒業後まで続く愛校心による堅牢な大学存立基盤の構築となるのである。

VI 自校史編纂とアーカイヴズ

最近、「アーカイヴズ」という用語をよく耳にする。まさに、「公文書等の管理に関する法律（平成21年7月1日法律第66号）」が制定されて以降、公的機関には公文書を保存する義務が生じたからに外ならない。

自校史編纂を成し遂げた大学は、21世紀になって編纂資料の保管、次回編纂に備えた措置を名目に次々と「〇〇史資料センター」「〇〇史（資）料室」といった機関を設置した。

もとはといえば、東京大学が百年史編纂を成し遂げた時に、教室いっぱいになるほどの史資料を目の前にして大学に掛け合ったことから具体的な機関設置が実現されたとされる。この時点では、史資料の活用というより、保存が主眼である。

アーカイヴズは、このように自校史編纂が大前提として始まった。その後、国公立大学は、くだんの公文書管理法の管轄になって、自校史編纂を伴わなくても「文書館」が設置されることになる。私立大学については、公文書管理法とは関係なく、編纂事業開始前から史料室設置する例が増えてきた。国士舘大学、大東文化大学、東海大学などは、典型的な例である。稀な例としては、東洋大学ある。百年史編纂最中に編纂室から史料室へと組織替えした。

【まとめとして】

<パソコンの導入浸透はデータベース化という新機軸>

平成18年のFMICSでの報告の際、「事実を語れるのは資料である」と強調した。また、資料が散逸してしまっているといわれるが、案外保存されているとも申し上げた。

実際に、拓殖大学で総ざらいした時(平成15年)に発見できなかった資料が、平成18年になって見つかった。戦災で被害を被った校舎校地の復旧に関する資料が、提供されたのである。収入印紙が貼付され、大学理事会及び私学財団の公印が押印してある原本すなわち一次資料の出現に、編纂室は沸いた。箱が傷んで埃にまみれていたので、よほど目に触れない場所で保管されていたのであろう。

そもそも、パソコンが普及するにあたって、契機は何であったか。

1995(平成7)年、華々しく「Windows 95」がMicro softからリリースされるや、爆発的な人気でそれまでの「Windows 3.1」から乗り換える人、新規にパソコン・ユーザになる人が急増した。なぜ、この現象が起きたのか。世の中は当時、「重厚長大から軽薄短小へ」を合言葉に少品種多量から多品種少量への転換期にあった。そして、マルチメディア・マルチタスクを売り物に便利さが受けたのがこの「Windows 95」であった。いささかフライング・リリースの懸念ありだったが、インターネット及びオフィス・オートメーションの普及も手伝って、今のWindows半独占世界の礎が築かれた。少し遅れてM.S.からリリースされた「Windows NT 3.5」は、サーバー用(NT Server)とクライアント用(NT Workstation)の2種類で構成されていた。「NT Server」は、瞬く間にネットワーク(LAN、WAN)の普及に貢献した。「NT」とは、「New Technology」の略である。これまで、パソコン・ネットワークのOS(NOS)といえば、NetWare又はNetWare liteが主流であった。NetWareを使用する場合、パソコン本体のOS(基本ソフト)が必要になる。Windows NTは、その両方を備えていたことで、シェア優勢を誇り、NetWareを駆逐してしまった。

当初は、「Windows NT Server＋Windows 9 5」の LAN が主流となったことを忘れてはならない。

我が国においては、文書管理（資料管理）の制度化、体系化が遅れているのは確かである。官庁役所でもまだ、文書管理は試行錯誤の段階にある。パソコンの導入浸透は、データベース化という目標、命題を与えてくれた。目録であれば、誰も悩むことはない。膨大な紙による“データ”の保存処理、仕分けに腐心している。これは、大学とて同じことである。文書管理規則(程)、文書保存規則(程)を制定し、枠組みづくりから始めている。

この次の段階が、どのようになっているのかが問題なのである。最近の文書・資料は、決められたとおりに処理される。だが、ファイル（簿冊）に綴り込んでキャビネットや高い棚に置かれ埃を被ったようなものの措置が、ここで問題としていることである。

<資料は、原文・現代文対照表記しなくても読める>

資料は、嘘をつかない。淡々と事実を伝えてくれる。だから、資料本文を現代語訳するとか、改ざんに類することはしてはならない。大学史で扱う資料のほとんどは、近代のものである。扱う資料は、原文・現代文対照表現しなくても十分読めるはずだ。

漢字が難しいと思うのは、普段使い慣れないことと当用漢字表によって使用制限をしたことに原因がある。常用漢字に改定しても、こういう制限がなされる以前の文書は、作成当時の基準に拠っているので編纂者もそれを自覚認識すべきである。

<項目ごと時系列を原則に整理・編集する>

そして、大学史編纂にあたって資料は、体系——「目次」体系——に従って、項目ごと時系列を原則に整理・編集すると、建学の精神、教学の方針が自然に浮かび上がって来よう。

学外の公共施設にある資料は、調査抽出が容易い。しかし、学内資料は、資(史)料室が設けられていても、事務局と研究所等教育部門とで統括部署が分かっていたりすると破綻の端緒となりかねない。似た資料があれば、これを糸口にして後追い調査が可能だが、糸口さえなかったらまったく手の打ちようがなくなる。

拓殖大学が採った「百年史資料集編集委員会」方式は、教授を委員長に据えて学内各部署の実務者が構成員になることで、溝を埋めることに成功したといえる。各部署所管文書の閲覧、提起に効を奏した。

＜大学史編纂は建学精神をブランド化する試み＞

現代は、あらゆる方面でブランドの時代である。国立大学が独立法人になり、民営化への足がかりともいうべき仕組みができた。個々の大学がブランド力を競う時代に生きているということである。建学の精神をブランドとして売り出していけるか否かは、大学の心構え、対応次第である。

各大学ともに文部科学省が推し進める「国公私『トップ30』」をはじめ、いわゆる選ばれた大学になる方策、選ばれるには何をどうすればよいのかを求めていることに違いはない。

これまで、きちんとした大学運営を為してきた大学と護送船団方式に便乗してきた大学との明確な線引きが大学史の世界にも行われる日が来るだろう。

だから、今、大学が何をにおいても作らなければならないのは、「資料編（集）」である。1日1日積み上げてきた事実は、嘘をつかない。これが、大学淘汰から大学自身を護る道といえないだろうか。

『同窓會報』第6号（明治44年6月30日、東洋協會専門學校同窓會）に「校風論」（在学 橋本白秋）という一文が掲載されている。末尾に「（未完）」とあり後半は、執筆されなかったのか見つけることができない。抜粋引用すると、

國家に國風一家に家風があつて始めて其風習を形造り眞の發展を圖るに最も其影響を逞するものである曰はば柱石である柱石なきものは永遠に長足の進歩確固の發達を遂ぐるとは勿論六ヶしいのである。・・・

次ぎに校風の建設に欽くべからざる二つの要素がある

一つは偉大なる人格で他は是に感化され統一され同化さるべき学生である學校が一つの脩養團體である時に若し其上に立つべき其の中心となるべき一つの偉大なる人格があるならば此の團體は人格の感化と統一とによりて其特色を自己の特色となすことが出来る換言すれば團體としての特色は該人格の反映である新島先生の下に於ける同志社、大隈伯の下に於る早稻田、福澤先生の下に於ける慶應義塾クラーク氏を戴ける札幌農學校新渡戸先生を戴ける向ヶ岡に於けるは著じるしき實例である

・・・

さて一旦建設され樹立されたる校風は如何にして維持發展さるゝか時勢は絶えず變遷する社會の思潮は一處に停滯するものでない即其人格は時に去り學生は年々退かねばならぬ比較的永久に残るは校舍制度ばかりである

・・・

上に立つ人格は脩養團體の精神的特色の本尊で言わば校風の中心で此の

人格の代る度毎に又校風も幾分か夫々の特色を映じ加味して多少の變遷を受けなければならぬ・・・學校の組織制度に變更がなく引續きて這入る學生が愛校の精神に燃へ向上進歩の思想と又尊古懷舊の念を具有する人であつたならば彼等は必ずや古き歴史を逗りて其當時の校風精神を採り益々その改善向上に努力するからである

・・・

校風の維持發展は實に「後繼者たるべき者の歴史的責任なり」と斯くの如く考へれば校風自身時に衰ふる事あるとも滅亡する事はない此點に於て「校風の歴史は正に一國の精神的歴史と同一である」忠君愛國の念に富みたる我國民により二千五百有餘年を一貫して大和魂が維持發揮された如くに校風は即ち後繼者によりて永久の生命を有するものである嗚呼福澤先生を失ひし慶應、クラーク氏の去つた札幌農學校遠く洛陽の地加茂の流れ比叡の山！新嶋先生を失ひし同志社の現状を見て轉々懷舊の念に堪えないのである[.]

自校史とは、「校風」の沿革、變遷を表現するものともいえるだろうか。明治44年、拓殖大学創立から10年の時点における在校生の寄稿である。既に、愛校心の芽生えを見た。

<資料編は、正史たる通史のバックボーン>

資料編は、正史たる通史のバックボーンとなりうる。通史編は、資料編を利用するにしても、陽の当たる面に重点を置いて執筆される現実からすれば、質的な差異が生じることはやむを得ない。

資料が示す事実は、大学にフィードバックのチャンスを与えてくれる。そして、将来を展望するための視野を広げてくれるものである。

以上のとおり、自校史編纂者及びその指揮にあたる方々が、「資料編」「年表編」「(総)索引編」の重要さに気づき、編纂計画を立案若しくは計画変更されることを提言し、この小文を締めることにする。

以上